

争論

One for “All” ?

1. 組合員活動から「コミュニティ・ワーク」へ
中村 久子・岡田 百合子

2. 他者に認められ、自分も満足できるはたらきかた
富沢 賢治

協同組合関係者なら誰でも知っている“OneforAll,AllforOne”。一般的には、「ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために」という訳が知られているようだが、1823 年に英国のラグビー校で始まったとされるラグビーの精神では、「ひとりはみんなのために、みんなは勝利のために」という意味であるとする説もあり、“All”や“One”については、この句が使用される背景や状況に合わせて様々な解釈ができるといえるのかもしれない。

近年、多岐にわたる社会的課題に対して、共助組織である協同組合が共益を超えていかに公益的機能を発揮するのが議論されてきている。すなわち、“OneforAll”の“All”に含まれる範囲が変わってきていると考えられるのではないだろうか。そんな疑問を、今回の争論では投げかけてみたいと考え、雇用や就業といった公益的活動に取り組んでいるワーカーズ・コレクティブ協会と、労働に関して長年研究されている富沢賢治氏にご意見をいただくこととした。

一言に「労働」と言っても、賃金が支払われる雇用労働の他、かつては家庭内に内部化されていたけれども社会経済的变化の中で外部化されてきた労働や、ボ

ランティアのような自発的労働など、社会に見られる「労働」はバラエティに富んでいる。富沢氏は、このような「労働」を「雇用労働」と「協同労働」に分類し、後者を担う一つとしてワーカーズ・コレクティブのような労働に関わる協同組合があるとしている。

ここでよく議論になるのが、労賃であるだろう。労働者によって作り出される協同労働は、一定の安定な収入がある人にとってはやりがいのある労働となるが、協同労働だけで生計を立てることはまだまだ難題がありそうだ。コミュニティや地域に貢献したいという想いのある人、特に若者が、協同労働で生計を立てることができるようになるためには、雇用労働や同一労働・同一賃金とは異なった新たな理論の構築が求められるのかもしれない。それは、例えば、同じ労働であったとしても各労働者の社会経済事情に合わせた労賃設定というような、“AllforOne”も含めた協同労働の構築のようなものが考えられるであろうか。どのような理論を構築できるのか、読者の皆様にも考えていただければ幸いである。

(紗)